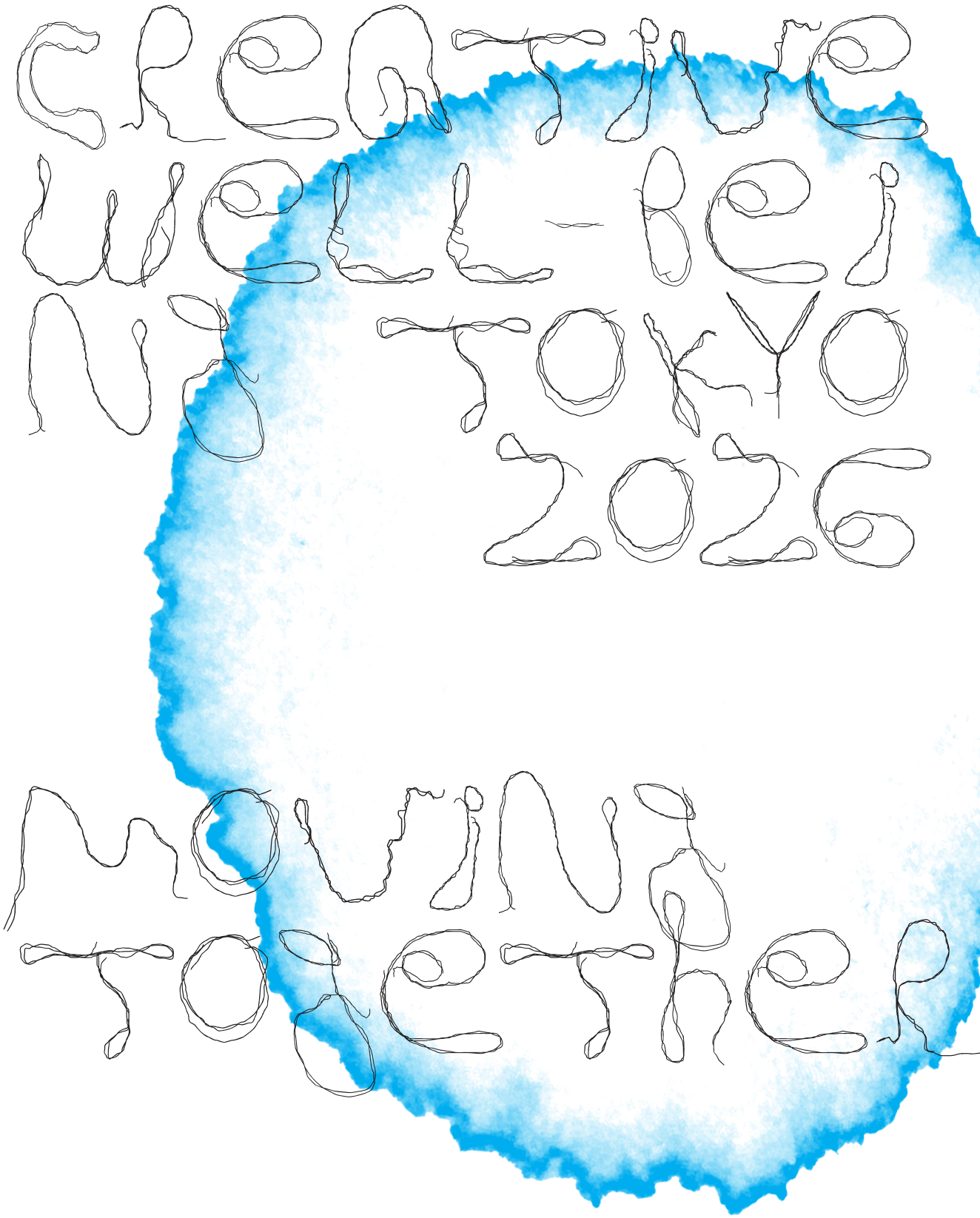
クリエイティブ・ウェルビーイング・トーキョー
だれもが文化でつながる 国際会議 2026



2026.10.28 |水| – 11.1 |日| 東京国際フォーラム

パンフレット
読み上げ QR コード

主催者あいさつ
Welcome Message

「だれもが文化でつながる会議」は、東京都とアーツカウンシル東京が取り組む「クリエイティブ・ウェルビーイング・トーキョー」の一環として、2022年から継続的に開催され、多様な登壇者とともに多くの知見と実践を共有し、議論を重ねてきました。

5年目となる今年は、だれもが文化でつながる国際会議2026「Moving Together ともに生きる文化」を開催いたします。これまでの議論の歩みを振り返りながら、わたしたちをとりまくあらゆるものとの関係性を編み直す芸術文化から「ウェルビーイング」の意味を捉え直し、ここ東京から「ともに生きること」の考え方を発信します。

5日間のプログラムは、各界で活躍するアーティストや研究者など多岐にわたる実践者が、芸術文化を含む多様な視点から対話を重ねる「カンファレンス」、登壇者と参加者が同じ場に集まり、身体性をともなった理解と交流を育む「スタジオ（ネットワーキング）」、アーティストの作品や東京都の取り組み事例等を紹介する「ギャラリー（展示）」の3つのセクションで構成されています。一人ひとりがよりよく生きるために、芸術文化に何ができるのかを考え、これからの共生社会のあり方とウェルビーイングの姿を探求します。

参加者のみなさまとともに考え、気づき、ときに問い直しながら、「ともに動き出す」5日間となることを願っています。

最後になりましたが、本国際会議の開催にあたり、ご協力いただいた関係者のみなさま、そしてご来場くださったすべてのみなさまに心より感謝申し上げます。

主催　東京都、公益財団法人東京都歴史文化財団 アーツカウンシル東京

Moving Together

Moving Together　ともに生きる文化

目　次

主催者あいさつ

プログラムスケジュール……2

プログラム　カンファレンス・スタジオ（ネットワーキング）・ギャラリー（展示）……4

スタディノート —— キックオフ企画「マルチスピーシーズ」（全3回）から……10

「Moving Together ともに生きる文化」……12

登壇者 / アーティスト　プロフィール……14

アクセシビリティ……18

Planning Sheet

	DAY 1 10/28(水)	DAY 2 10/29(木)	DAY 3 10/30(金)		DAY 4 10/31(土)		DAY 5 11/1(日)	
	ロビーギャラリー		ホールB5	ホールD5	ホールB5	ホールD5	ホールB5	ホールD5
10：00					10:00 - 12:00 (開場9:30) **セッション 1** **しなやかな共助** 森下 有、瀬尾夏美、 クリスティン・ウォン・ヤップ		10:00 - 12:00 (開場9:30) **セッション 3** **Moving Together** **夢とともに生きる** サンギータ・ジョギ、 小林エリカ、西 加奈子、 ギータ・ヴォルフ	10:00 - 12:30 (開場9:30) **上映・トーク** **舞台『TRAIN TRAIN TRAIN』** **映像上映＆トーク** 栗栖良依、森山開次
11：00								
12：00				12:00 - 15:00 (開場11:30) **オープンミーティング** **ろう者と聴者の遭遇、** **そこから生まれたもの** **第1部 身体と空間と表現** 雫境、木藤 歩、牧原依里、 山口英峰、杉山 至、長島 確				
13：00						13:00 - 15:00 (開場12:30) **ワークショップ** **わたしの「わたしは なれる」** **の旗をつくる** サンギータ・ジョギ、 在本彌生、小林エリカ ※要事前応募		
14：00								14:00 - 15:00 (開場13:30) **レクチャーパフォーマンス** **『聴者を演じるということ 序論』** 牧原依里、數見陽子、山田真樹
15：00					15:30 - 17:30 (開場15:00) **セッション 2** **アイデンティティと文化** ジュマナ・エミル・アブード、 北原モコットゥナシ、松﨑 丈		15:30 - 18:00 (開場15:00) **クロージングセッション** **クリエイティブ・** **ウェルビーイング** **ともに生きる文化** 青柳正規、小池一子、宮島達男、 ジャスティーン・サイモンズ、 堀内奈穂子、 ロジャー・マクドナルド	
16：00	16:00 - 17:00 **トーク** **興望館セツルメントから** **考えるウェルビーイングとアート** 青木 彬、碓井ゆい		16:00 - 17:30 (開場15:30) **オープンミーティング** **ろう者と聴者の遭遇、** **そこから生まれたもの** **第2部 ろう者の「オンガク」** 雫境、松﨑 丈、 横尾友美、牧原依里					
17：00		17:00 - 18:00 **トーク** **もしもディスレクシアの** **小学生なら** 小助川雅人、藤堂栄子						
18：00			18:30 - 21:00 (開場18:00) **プロローグ＆** **オープニングセッション** **芸術文化がつむぐ明日** 梶谷真司、鴻池朋子、 小山田 徹、齋藤百合子 モデレーター＊堀内奈穂子、 ロジャー・マクドナルド ＊すべてのセッションのモデレーター (以降、表記略)		18:00 - 19:00 (開場17:30) **レクチャーパフォーマンス** **『聴者を演じるということ 序論』** 牧原依里、數見陽子、山田真樹			
19：00	19:00 - 20:00 **ワークショップ** **音さがしの人** 黒川 岳	19:00 - 21:00 **ワークショップ** **音楽つくりやさん** **by TURN LAND** 井川 丹、田中文久、 富塚絵美						
20：00	20:00 - 21:00 **ワークショップ** **音さがしの人** 黒川 岳							
21：00								

ギャラリー(展示)……ロビーギャラリー

10/28(水)……15:00-21:00

10/29(水)・10/30(金)・10/31(土)……11:00-21:00

11/1(日)……11:00-15:00

カンファレンス 会場 ホールB5

conference

モデレーター
堀内奈穂子［アーツイニシアティヴトウキョウ（AIT/エイト）キュレーター、「dear Me」プロジェクトディレクター、保育士］、ロジャー・マクドナルド［アーツイニシアティヴトウキョウ（AIT/エイト）キュレーター、美術史家］

プロローグ＆オープニングセッション

芸術文化がつむぐ明日

日時　10月30日（金）18:30-21:00（開場18:00）
プロローグでは、オープニングスピーチのあと、これまで数年間にわたる「だれもが文化でつながる会議」の議論の歩みをたどり、オープニングセッションへとつなぎます。複雑で変化し続ける社会において、ウェルビーイングは個人の内側に閉じるのではなく、他者や環境、そしてより長い時間のなかで捉え直されつつあります。人間中心にとどまらない眼差し（＝マルチスピーシーズ）をもって場をひらき、自然や都市と人間生活との間で実践や研究を重ねる登壇者が、これからの時代の芸術文化のありようを問いかけます。

登壇者　梶谷真司［東京大学大学院 総合文化研究科 教授、共生のための国際哲学研究センター（UTCP）センター長］、鴻池朋子［アーティスト］、小山田 徹［芸術家、京都市立芸術大学 学長］、齋藤百合子［ロードアイランド・スクール・オブ・デザイン 名誉教授］

セッション1

しなやかな共助

日時　10月31日（土）10:00-12:00（開場9:30）
天災や不測の事故で、慣れ親しんだ場所やあたりまえの状況が一変し、その環境に身を置かざるをえないとき。人と人とのコミュニケーションやケアのあり方を問い直すとき。気鋭のアーティストや研究者たちは、どのように目の前の状況を読み解き、これまでとは違う関係性を編んでいくのか。しなやかな共助から生まれた事例から、ともに生きる文化のあり方を探ります。

登壇者　森下 有［研究教育者、東京大学生産技術研究所 特任准教授］、瀬尾夏美［アーティスト、作家］、クリスティン・ウォン・ヤップ［ビジュアルアーティスト、社会実践者］

セッション2

アイデンティティと文化

日時　10月31日（土）15:30-17:30（開場15:00）
わたしたちの社会では、文化や歴史、身体、土地、周囲とのかかわりなど、多様な要素のなかで「わたし」をかたちづくっています。しかし社会の「あたりまえ」は、ときに誰かを沈黙させ、文化やルーツを見えなくしてしまうことがあります。当事者として創造的・学術的な実践を続けてきた識者と、ともに生きることに潜む困難や緊張、そして対話や表現の可能性を考えます。

登壇者　ジュマナ・エミル・アブード［ビジュアルアーティスト］、北原モコットゥナシ［北海道大学アイヌ・先住民研究センター 教授］、松﨑 丈［宮城教育大学 教授］

セッション3

Moving Together 夢とともに生きる

日時　11月1日（日）10:00-12:00（開場9:30）
社会や文化、時代の情勢は、ときに「わたし」の自由や尊厳を阻もうとしますが、それでも人は、希望を見出し、生きる道を模索することができます。異なる土地や境遇のなかで創造と実践を積み重ねてきた登壇者たちは、夢を抱きながらそれぞれの経験と想像力を他者へと手渡してきました。「わたし」の夢が他者の夢へとつながった一連の事例を通して、人の尊厳について語ります。

登壇者　サンギータ・ジョギ［アーティスト］、小林エリカ［作家、アーティスト］、西 加奈子［作家、アーティスト］、ギータ・ヴォルフ［タラブックス代表］

クロージングセッション

クリエイティブ・ウェルビーイング ともに生きる文化

日時　11月1日（日）15:30-18:00（開場15:00）
複雑で変化し続ける社会に対し、芸術文化のはたらきが生む「クリエイティブ・ウェルビーイング」を東京から発信します。マルチスピーシーズな世界認識に始まり、共助、アイデンティティ、尊厳の観点へと展開した議論を、アートや文化政策に精通した登壇者が受けとめ、未来に向けて提言します。

登壇者　青柳正規［アーツカウンシル東京 機構長］、小池一子［クリエイティブ・ディレクター］、宮島達男［現代美術家］、ジャスティーン・サイモンズ［ロンドン市副市長（文化・クリエイティブ産業担当）］、堀内奈穂子、ロジャー・マクドナルド

スタジオ（ネットワーキング） 会場 ホールD5

Studio: Networking

オープンミーティング

ろう者と聴者の遭遇、そこから生まれたもの

日時　10月30日（金）第1部 12:00-15:00（開場11:30）、第2部16:00-17:30（開場15:30）
異なる言語と文化をもつ「ろう者」と「聴者」が、お互いへの理解を急がず、時間をかけて出会う経験から、何が生まれたのか。東京2025デフリンピックの文化プログラムとして制作・上演された『黙るな 動け 呼吸しろ』における協働のプロセスのなかで生じた課題と発見を語ります。創作にかかわったコアメンバーが、自身や周辺に起きた変化や兆しを言語化し、今後の可能性につなげます。

第1部　身体と空間と表現

演劇の空間演出を、劇場内のみならず都市空間にまで拡張するセノグラフィの視点を共有し、ろう者と聴者の身体性の違いを前提としたこれからの劇場のあり方や、舞台芸術におけるろう者の人材育成について考えます。

登壇者　雫境［舞踏家］、木藤 歩［照明家］、牧原依里［演出家、映画作家］、山口英峰［舞台監督］
ゲスト　杉山 至［舞台美術家、セノグラファー］
モデレーター　長島 確［ドラマトゥルク］

第2部　ろう者の「オンガク」

聴覚で認識する音楽とは異なる、ろうコミュニティから生まれる「オンガク」の概念や世界観を共有し、『黙るな 動け 呼吸しろ』の公演制作を経て深まったその探求の成果を話し合います。

登壇者　雫境［舞踏家］、松﨑 丈［教育学者］、横尾友美［アーティスト］
モデレーター　牧原依里［演出家、映画作家］

ワークショップ

わたしの「わたしは なれる」の旗をつくる

日時　10月31日（土）13:00-15:00（開場12:30）
インドで生まれ、海をわたってきたタラブックスの絵本『わたしは なれる』（green seed books、2025年）のことばをもとに、参加者それぞれの「わたしは なれる」を絵に描き、一緒に旗をつくるワークショップです。本書に描かれている夢は、その場にいる人々とどのように響き合うのか。「わたし」から「わたしたち」への旅を、作者・翻訳者とともに体験します。

アーティスト　サンギータ・ジョギ
ゲスト　在本彌生（写真家）
ファシリテーター　小林エリカ

レクチャーパフォーマンス

『聴者を演じるということ 序論』

日時　10月31日（土）18:00-19:00（開場17:30）、11月1日（日）14:00-15:00（開場13:30）（2回公演）
観客は今まで「個人」とされてきた「聴者」がカテゴリーで括られることを目撃する。演じる人はろう者役者の數見陽子と山田真樹。ろう者の身体で演じられる「聴者」に、私たちはどこまで言及することができるのか。演じる者と演じられる者、その関係を超越し、分かち合うことは可能なのか。（公式作品解説より）

演出　牧原依里
出演　數見陽子、山田真樹

上映・トーク

舞台『TRAIN TRAIN TRAIN』映像上映&トーク

日時　11月1日（日）10:00-12:30（開場9:30）
2025年秋に東京芸術劇場で上演された舞台『TRAIN TRAIN TRAIN』の定点収録映像（高画質記録）を上映します。東京2020パラリンピック開会式のレガシーを受け継ぎ創作されたこの作品について、アクセシビリティディレクションと振付・演出を担った二人が、創作の舞台裏と作品の魅力を語ります。

登壇者　栗栖良依［アートプロデューサー、芸術監督］、森山開次［ダンサー、振付家、演出家］

ギャラリー（展示）　会場　ロビーギャラリー

GALLERY: exhibition

会期　10月28日（水）15:00-21:00、10月29日（木）・30日（金）・31日（土）11:00-21:00、11月1日（日）11:00-15:00

ジュマナ・エミル・アブード「Drawings」

水源にまつわる民間伝承や、水の精霊、祖先などに着想を得たドローイング。目に見える風景と見えない存在、想像と人々が生きてきた現実を結び合わせ、幾層にも重なる時間と生命の流れをさまざまな素材を用いて描く作品は、植民地主義的な構造に抗いながらも、生き抜く力の表現でもあります。

青木 彬、碓井ゆい「共に在るところから／With People, Not For People」

100年以上の歴史をもち、セツルメント運動の拠点でもあった福祉施設「興望館」。その実践のなかに、人々が地域においてよりよく生きるためのヒントを見出し、ワークショップを通じてアート作品としました。

フランソワ・デイ／Silly Type Foundry「Clementite」

アーティストがスイスの精神科病院の患者たちとともに、野生のクレマチスのつるを編み、折り曲げながらつくった造形。植物と人、異なる経験をもつ人々が、身体を動かしながらかたちにしていくプロセスから生まれました。本会議のキービジュアルには、デザイナーがこの作品からつくった書体を使用しています。

サンギータ・ジョギ、タラブックス「わたしは なれる」

ペンで描かれた原画が、デザイナーやカラリスト、製本職人などの手仕事を経て、色鮮やかな一冊に結実するまでのバトンリレー。そこから生まれたシルクスクリーン画や絵本を展示します。

是恒さくら「ありふれたくじら」
鯨とともに生きる文化を見つめ、丁寧に綴られた物語や刺繍による作品は、東北やアラスカなど世界各地の人々の暮らしと鯨の日常的な関係性を伝えます。わたしたちはそこから、あらためて文化のスケールを見直すことができます。

小山田 徹「崇仁100年の森・緑の回廊プロジェクト」
JR京都駅の東側、崇仁地区に100年の森・緑の回廊をつくるプロジェクトです。地元の人々や京都市との話し合いを進めながら、いまの人間中心主義、経済優先の世の中に、「美しい引き算」の新たな価値観を示すプロポーザルです。

宮島達男「Mutual Counterpoint」/「時の海–東北プロジェクト」/「時の蘇生・柿の木プロジェクト」
刻々と流れる数字の隙間から、世界各地のニュース映像がリアルタイムに姿を現す作品。異なる旋律が独立性を保ちながら響き合う「対位法」に着想を得て、同時に進行する世界の出来事と、わたしたちの生のあり方を問いかけます。それぞれの現実が交差する世界で、ともに生きるとはどういうことかを考えます。/ 3,000名の人々とかかわりながら制作する《Sea of Time - TOHOKU》。アーティストの呼びかけにより地域の力を結集し、この作品を恒久設置するための新たな美術館を建設するプロジェクトが進行しています。プロジェクトへのかかわりを通して、他者への想像力を育み、震災の記憶や経験を継承することについて考えます。/「被爆柿の木2世」の苗木を植樹し、世界中のこどもたちに命と平和への願いを手渡してきた30年にわたるプロジェクト。異なる地域や宗教、人種や言葉を超えたこの活動を、ともに生きる文化（クリエイティブ・ウェルビーイング）の視点で捉えます。

森下 有「メム オープンリサーチキャンパス」
地域の環境資源を「再読」し、世代や背景を越えてともに学び、探究する場をつくる実践の設計とプロセスを展示します。北海道大樹町「メム」を舞台に、人や植物、動物など、地域にある多種多様な存在を「可能性の束」として捉え直しながら、関係性の再構成をしているプロジェクトです。

瀬尾夏美「へびと地層」
令和元年東日本台風で被災した宮城県丸森町で、住民とのやりとりと伝承民話のリサーチから生まれた「やまのおおじゃくぬけ」を中心に、各地の災害や戦争の記憶継承を担う表現のあり方や、対話の可能性を考える作品群を展示します。

クリスティン・ウォン・ヤップ「Life Lessons」
人々から寄せられた、困難を乗り越えるための言葉や、同じような経験をする人へのアドバイスをもとに制作した活版印刷の作品。誰かの経験から生まれた言葉を、別の誰かへ手渡していくことで、経験や知恵の共有と自己省察の循環を生み出します。

Haruki Kaito +「Lighting Driver Project」
国内外の舞台や展覧会のライティングデザインを手がける照明家の海藤春樹と、アートディレクターの富塚絵美を中心とするアートプロジェクト。光が、見るための「道具」を超え、そこにいる人の動きや気配に呼応しながら生命のように存在する環境の実現を目指します。

「もしもディスレクシアの小学生なら」
読み書きに困難のある学習障害「ディスレクシア」の当事者が直面している状況を、小学校の教室を舞台にしたVR映像で疑似体験することができます。※このVRはディスレクシアの見え方を再現するものではありません。
VR体験　10月29日（木）から31日（土）13:00-18:00、11月1日（日）13:00-15:00

「ヘラルボニー」
今年で3回目の開催となる国際アートアワード「HERALBONY Art Prize」の取り組みを紹介します。

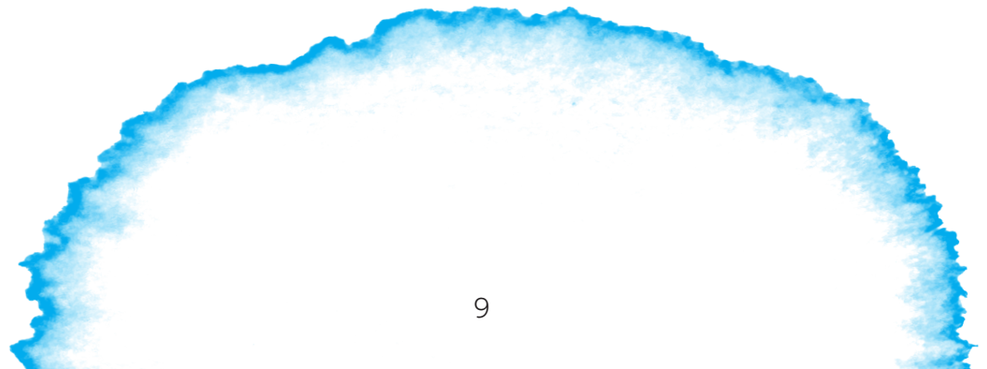
「クリエイティブ・ウェルビーイング・トーキョーの歩み」バナー
「都立文化施設の取り組み」10の施設紹介パネル
「TOKYO FORWARD 2025 文化プログラム」ろう者と聴者が遭遇する舞台作品『黙るな 動け 呼吸しろ』、舞台『TRAIN TRAIN TRAIN』
「オールウェルカムTOKYO キャンペーンの成果」パネル

トーク
興望館セツルメントから考えるウェルビーイングとアート
日時　10月28日（水）16:00-17:00
登壇者　青木 彬［インディペンデント・キュレーター、社会福祉士］、碓井ゆい［美術作家］
展覧会「共に在るところから／With People, Not For People」では、東京都墨田区にある福祉施設「興望館」の歴史資料をもとに、ワークショップによる作品制作が行われました。この企画のキュレーターとアーティストの二人が見出した、興望館におけるセツルメントの活動の今日的な意味や、アートとの接点を語ります。

トーク
もしもディスレクシアの小学生なら
日時　10月29日（木）17:00-18:00
登壇者　小助川雅人［資生堂アート＆クリエイション本部エグゼクティブ・クリエイティブ・ディレクター］、藤堂栄子［EDGE会長］
読み書きに困難のある学習障害「ディスレクシア」。こどもたちが直面する状況と、その特性とともによりよく生きていくために、社会はどのように変化する必要があるか。展示するVR映像の企画者と、これまで啓発・支援活動を行ってきた当事者がともに語ります。

ワークショップ
音さがしの人｜アーティスト　黒川 岳
日時　10月28日（水）19:00-20:00、20:00-21:00（2回開催）
会場である東京国際フォーラムという建築空間に響く音をさがすワークショップです。耳を澄まし、聞こえてくる音や振動と、それらを発しているもの、伝えているものの存在に触れてみます。同じ空間にいながらも、まったく同じ感じ方をすることはない――参加者とアーティスト、それぞれが触れた「音」を共有し合います。

ワークショップ
音楽つくりやさん by TURN LAND｜アーティスト　井川 丹、田中文久、富塚絵美
日時　10月29日（木）19:00-21:00
身体を動かしたり、身近なものをスキャンしたり、図形を描いたりして「楽譜」をつくります。そしてそれを、特別なプログラムを組んだ「デジタル楽器」で鳴らします。曲のイメージに合わせて楽器の音色を調整したり、「楽譜」を並べ替えたりしながら最終的にみんなで一つの楽曲をつくりあげます。



スタディノート
STUDY NOTES

——キックオフ企画「マルチスピーシーズ」(全3回) から
国際会議に先立ち、わたしたちは「マルチスピーシーズ」というキーワードを手がかりに、全3回のトークをひらきました。ウェルビーイングを、個人が達成する状態としてではなく、人ならざるものを含むかかわりのなかで捉え直す。会議の土台となる考え方を、登壇者である写真家、アーティスト、歴史学者、そして本会議のモデレーターとともに共有する時間でした。その内容を、ダイジェストでご紹介します。
国際会議会場のロビーギャラリーでは、各回の映像アーカイブもご覧いただけます。



Vol.1　石川直樹 (写真家)

1977年東京生まれ。東京藝術大学大学院美術研究科博士後期課程修了。2011年『CORONA』により土門拳賞を受賞。2020年『まれびと』、『EVEREST』により日本写真協会賞作家賞を受賞。最新刊に『シシャパンマ』、『K2』、『最後の山』などがある。

初回は、8,000mを超える14の山すべてを旅し、ふもとの暮らしから頂までをフィルムのカメラで写してきた写真家の石川直樹さん。山では、暖房や冷房のような環境調節は望めません。周りの環境を自分に合わせるのではなく、自分の体のほうを低酸素や寒さに順応させていくしかない。抵抗するのではなく、自分が変わりつづけること——石川さんの語りは、都市の暮らしの前提を静かに裏返します。山とともに生きるシェルパの人々やヤク、死者が虫にも生まれ変わるというチベット仏教の世界観。そこでは、人とその他の生き物の境がゆるやかにほどけていきます。隣の山から水平にエベレストを撮れば、見知ったはずの姿にも未知の世界があらわれる。そしてそこに至る旅は、一人きりのものではありません。K2の登頂を諦めたとき、隣の山へ行かないかと軽やかに誘ってくれたのは、若いシェルパの仲間たちでした。街ではどんなに取り繕って生きていても、山では弱さまでさらけ出すことになる。だからこそ、あらゆるものと深く結ばれるのだと石川さんは言います。

未知・その瞬間を生きる・シェルパの仲間・命を燃やす

日時　2026年8月3日 (月)
会場　自由学園明日館
モデレーター　堀内奈穂子、ロジャー・マクドナルド



Vol.2　是恒さくら (アーティスト)

アラスカ大学フェアバンクス校を経て、東北芸術工科大学大学院で地域デザイン領域を修了。鯨類と人とのかかわりや海の民俗文化に関心を寄せ、世界各地でのフィールドワークをもとに執筆と刺繍作品の制作を行っている。近著に『ありふれたくじら』など。

2回目は、鯨とともに生きる人々を訪ね、その語りを刺繍と文章に編んできたアーティストの是恒さくらさん。是恒さんの眼差しの原点は留学先のアラスカにあります。大学のスタジオには各地の村から招かれた先住民族の長老たちが数週間滞在し、いつもと同じようにバスケットを編み、毛皮を裁っていました。学生たちは同じ作業台を囲んでその手元を見つめて真似をしてみたり、食事をとりながら昔話を聞いたりしました。長老たちがカリブー (野生のトナカイ) の毛皮からつくる服 (パーキ) には型紙がありません。毛の流れと色の境目を読んで裁つ——その動物とともに暮らしてきた人だけがもつ手つきです。暮らしと地続きにあるものづくりを見つめてきた是恒さんは、つくることと語ることは切り離せないと言います。鯨についての語り方も同じ。歌をうたい、人懐っこく、地球上最大で、知能が高く、絶滅の危機にある。そんな特徴をすべて備えた鯨は、実はどこにもいません。そのような想像上の姿ではない、日々をともにする「ありふれたくじら」の姿を作品にしてきました。人も動物も同じ魂をもち、外側の毛皮だけが違うという先住民たちの教えに影響を受けた是恒さんの世界観は、自分ではない誰かの視点と出会い、かかわることで育まれてきました。

ありふれたくじら・二項対立を超える・同じ魂・見て真似る学び ・誰かの視点

日時　2026年8月20日 (木)
会場　自由学園明日館
モデレーター　堀内奈穂子



Vol.3　藤原辰史 (歴史学者)

2003年に京都大学人文科学研究所助手に着任して以来、食と農をめぐる歴史研究に携わってきた。『ナチスのキッチン』で河合隼雄学芸賞、『給食の歴史』で辻静雄食文化賞、『分解の哲学』でサントリー学芸賞を受賞。主な著作に『植物考』『生類の思想』など。

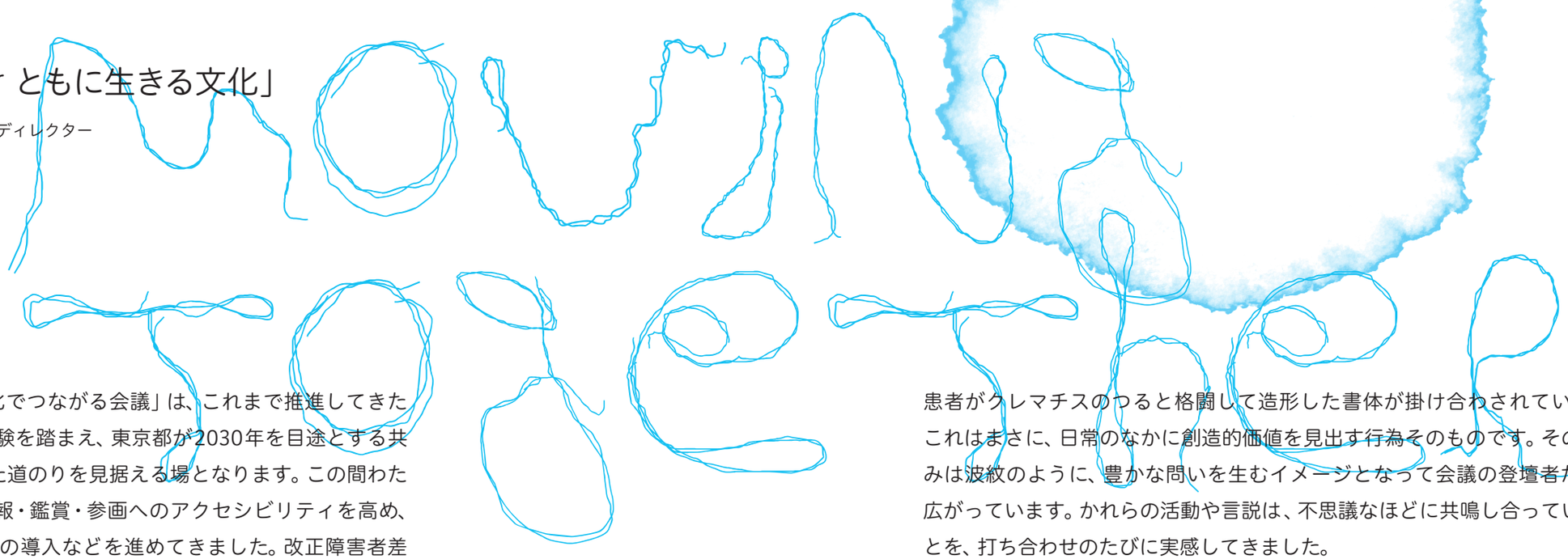
3回目は、食と農の歴史から世界を捉え直す視点を藤原辰史さんから伺いました。世界の食べ物はごく少数の企業に握られ、ときに武器にもなってきた —— 食権力の話からトークははじまります。水も土も、体をめぐる水分も絶えず循環しており、地球上の総量は変わりません。「環境」という言葉には、自分がその外側に立って眺めているような響きがあるけれど、そうではなく、自然のなかに自分がある。藤原さんはだからこそ、自分のなかにある自然として体液に着目しています。涙も汗も、流そうと思って流せるものではありません。わたしたちは水の流れの一つの通過点にすぎず、川の支流のように生きていると指摘しています。生態学のいう生産者・消費者に加え、見落とされがちな分解者のはたらきに、そのヒントがあります。例えば漬物は、浸透圧の力を借りて細胞膜という境界を破り、にじみ出た体液を微生物が食べて発酵していく技術です。「つくる」を「育む」へ、「建てる」を「生える」へ、そして「集める」を「湧く」あるいは「集る (たかる)」へ。このようにして世界にかかわる言葉を編み直すことが、あらゆる境界をほどく実践につながる。アートの役割もまた、その視座からの読み直しができると気づかされました。

食権力・分解者の目線・体液と循環・境界を溶かす・湧く

日時　2026年9月3日 (木)
会場　SCC千駄ヶ谷コミュニティセンター
モデレーター　ロジャー・マクドナルド

「Moving Together ともに生きる文化」

だれもが文化でつながる国際会議2026 ディレクター
森 司
アーツカウンシル東京 社会共生担当
岡崎未侑



5回目を迎える「だれもが文化でつながる会議」は、これまで推進してきたアクセシビリティ環境整備の経験を踏まえ、東京都が2030年を目途とする共生社会の実現に向けて、残された道のりを見据える場となります。この間わたしたちは、文化施設における情報・鑑賞・参画へのアクセシビリティを高め、プログラム開発や支援デバイスの導入などを進めてきました。改正障害者差別解消法の施行により、民間事業者にも合理的配慮の提供が義務化されたのが2024年。この年の国際会議では、「障害があるとはみなされていない人々」のウェルビーイングについて問題提起がなされました。それは、自らを社会に適応させ、理想化した「心身ともに健康な状態、基準」を維持することを個人に求める、「自己責任化されたウェルビーイング」が、かえって人々を疲弊させているのではないかという指摘です。

約100年前に生きた詩人・宮沢賢治は『農民芸術概論綱要』で、「世界がぜんたい幸福にならないうちは個人の幸福はあり得ない」と説いています。しかし現在の世界に目を向ければ、戦争や紛争、自然災害などのニュースがいまなお絶えません。わたしたちは、自分一人の幸福や健康をどう実現するかだけではなく、他者や環境との関係のなかで「よく生きる」とは何かを考える必要があるのではないでしょうか。

本会議のテーマは、「Moving Together ともに生きる文化」です。検討するにあたって、生きづらさをはらむ現代社会を表す言葉を書き出してみました。そこには「所有」や「差別」といった価値観やふるまいが遍在し、深く根を張っていることに気づきます。同時にそれらを問い直す言葉として、「交換」「アイデンティティ」「尊厳」や「ケア」といったキーワードも浮かび上がりました。社会的な障壁の根底にある「意識上のバリア」と、それを解きほぐす芸術文化のはたらきを軸に、会議のかたちを模索していきました。

会議を具体化する過程は、わたしたちにさらなる気づきをもたらしました。例えば、会議のイメージを可視化するキービジュアル。水滴が偶然に生み出すインクのにじみを捉えたデザイナーの視点と、アーティストと精神科病院の患者がクレマチスのつると格闘して造形した書体が掛け合わされています。これはまさに、日常のなかに創造的価値を見出す行為そのものです。そのにじみは波紋のように、豊かな問いを生むイメージとなって会議の登壇者たちへ広がっています。かれらの活動や言説は、不思議なほどに共鳴し合っていることを、打ち合わせのたびに実感してきました。

また、会議に先立つキックオフ企画「マルチスピーシーズ」では、人間のコントロールがおよばない場所や、環境と人との関係へ意識を向ける知見が共有され、ウェルビーイングを捉え直すための前提をやわらかく拡張してくれました。本会議ではそのような人間中心主義ではない視座から、芸術文化とウェルビーイングの関係を捉え直す新たなビジョンを、「クリエイティブ・ウェルビーイング」という言葉で提案したいと思います。本会議のテーマである「Moving Together」は、そのような社会を実現するためのアクションを表していると同時に、「ウェルビーイング」を、個人が達成するある時点の「状態」ではなく、他者や環境との関係のなかで生み出され、絶えず変化していく「動き」として捉える言葉です。

だれもが文化でつながる国際会議2026は、正解を提示して答え合わせをする場ではなく、価値ある問いを立て、共有し、登壇者と参加者が一緒に学び合う機会としたいと考えています。企画の準備段階から伴走するモデレーターの二人が、オープニングからクロージングまで、対話のバトンをリレーしていきます。

芸術文化がもたらすクリエイティブの役割と、そこから見出されるウェルビーイングのあり方を、「クリエイティブ・ウェルビーイング」の言葉で東京から世界に向けて発信する。そのための対話を、いま、はじめましょう。

プロフィール
PROFILES

カンファレンス
CONFERENCE

モデレーター



堀内奈穂子　アーツイニシアティヴトウキョウ［AIT/エイト］キュレーター、「dear Me」プロジェクトディレクター、保育士

アーツイニシアティヴトウキョウ［AIT/エイト］にて展覧会や教育プログラムを企画。2016年より多様なこどもや若者とアートをつなぐプロジェクト「dear Me」を主宰。アートとケア・福祉の接点を探りながら、保育士としても活動する。



撮影：Takizawa Sayaka

ロジャー・マクドナルド　アーツイニシアティヴトウキョウ［AIT/エイト］キュレーター、美術史家

イギリスで神秘宗教学を学んだのち、現代美術史の博士号を取得。国内外の展覧会を数多くキュレーション。長野県佐久市に「フェンバーガーハウス」を創設し、2023年より多津衛民藝館館長。著書に『DEEP LOOKING』。創設メンバーの一人でもあるAITにて、アートと気候アクションをつなぐ活動も展開。

プロローグ＆オープニングセッション　芸術文化がつむぐ明日



梶谷真司　東京大学大学院 総合文化研究科 教授、共生のための国際哲学研究センター（UTCP）センター長

専門は哲学、医療史、比較文化。近年は学校や企業、地域コミュニティなどで「共に考える場」をつくる活動を行っている。近著に『問うとはどういうことか 人間的に生きるための思考のレッスン』、『哲学対話の冒険日記　われら思う、ゆえにわれらあり』、『思想としての育児　知識と身体の歴史哲学』がある。



鴻池朋子　アーティスト

さまざまなメディアで作品を発表し、エネルギーと芸術の根源的な問い直しに取り組んでいる。主な個展に「インタートラベラー」（東京オペラシティアートギャラリー、2009年）、「根源的暴力」（神奈川県民ホールギャラリー、2016年）など。2017年に芸術選奨文部科学大臣賞を受賞、2020年に毎日芸術賞を受賞、2023年に紫綬褒章を受章。



小山田 徹　芸術家

1961年鹿児島生まれ。京都市立芸術大学在学中に「ダムタイプ」を結成し国内外で活動。1998年頃より、共有空間の獲得をテーマに、人々が集い交流する場の創造を活動の核に据えてきた。コミュニティカフェの立ち上げなど、人と人とが出会う場づくりを実践している。2025年より京都市立芸術大学理事長・学長。



齋藤百合子　ロードアイランド・スクール・オブ・デザイン 名誉教授

国際基督教大学卒業後、アメリカの大学院で哲学博士号を取得。ロードアイランド・スクール・オブ・デザインで美学を中心に教鞭をとった。日常美学、環境美学、日本の美学を主題に執筆と講演を続け、専門誌『Contemporary Aesthetics』の編集長を務める。主な著作に『Aesthetics of Care』など。

セッション1　しなやかな共助



森下 有　研究教育者、東京大学生産技術研究所 特任准教授

北海道南十勝のメムを拠点に、UTokyo Ushioda Memu Earth Labを主宰。目の前の環境を可能性の束として再読し、地域の多様なメンバーが世代を越えて生き、生かされる関係性を再構成する試みを続けている。「Memu Open Research Campus」を運営し、研究・実践・参加の拠点づくりに取り組む。



撮影：Ikeda Hiroshi

瀬尾夏美　アーティスト、作家

土地の人々の言葉と風景の記録をしながら、絵や文章をつくっている。東日本大震災を契機に岩手県陸前高田市へ移住。2015年にコレクティブ「NOOK（のおく）」を設立し、現在は江東区で「Studio 04」を運営しながら、「語れなさ」をテーマに各地を旅し、物語を書いている。著書に『あわいゆくころ』、『声の地層』など。



クリスティン・ウォン・ヤップ　ビジュアルアーティスト、社会実践者

カリフォルニア芸術大学で美術学修士号を取得。地域社会とのかかわりや出版、パブリックアートを通じて、ウェルビーイングや帰属意識、レジリエンスをめぐる草の根の視点を集め、発信してきた。ウェルカム・トラスト、スタンフォード大学などと協働。「Bay Windows」「The Belonging Project」「Kindling」などのアートプロジェクトを主宰している。

セッション2　アイデンティティと文化



撮影：岩根 愛

ジュマナ・エミル・アブード　ビジュアルアーティスト

スレイド美術学校（ロンドン）で美術博士号を取得。パレスチナや日本など各地の水にまつわる民話から着想を得て、紙、映像、ガラスを用いた作品を制作している。水や遺産、想像力などを手がかりに、文化を越えた集団的な語り継ぎを促すプロジェクト「The Water Diviners」を世界各地で展開。



北原モコットゥナシ　北海道大学アイヌ・先住民研究センター 教授

大学院在学中よりアイヌ民族博物館に学芸員として勤務。アイヌの信仰、神話、音楽といった主題を、ジェンダー研究や差別の解消、脱植民地化といった問いと結びつけることを模索している。共著に『アイヌもやもや』、共編著に『最新アイヌ学がわかる』などがある。



松﨑 丈　宮城教育大学 教授

博士（教育学）。ろう、難聴、ろう重複障害のこどもたちとのコミュニケーションをめぐる心理学的な実践研究を続けてきた。2020年より、手話を用いるろう者の感覚と身体性に根ざしたオンガクを研究し、ろう学校での出前授業など多彩な活動を展開している。著書に『聴覚障害×当事者研究』など。

セッション3　Moving Together　夢とともに生きる



サンギータ・ジョギ　アーティスト

インドのグジャラート州アーメダバード生まれ。若い母として、嫁として家事に追われる日々のなか、午後や夜に時間を見つけて絵を描く。その自信に満ち、遊び心あふれる線は、新たな世界を紡ぎ、あり得たかもしれない別の人生を探し、女の生き方を祝福する。著書に『The Women I Could Be』（邦訳『わたしは なれる』）がある。



小林エリカ　作家、アーティスト

時間や歴史、家族や記憶など目に見えないものを手がかりに、調査に基づく作品をつくっている。小説『女の子たち風船爆弾をつくる』で第78回毎日出版文化賞を受賞。文学・漫画・美術を横断し、第13回ベルリン・ビエンナーレにも参加。訳書にサンギータ・ジョギ『わたしは なれる』など。arbaro books主宰。



撮影：若木信吾

西 加奈子　作家、アーティスト

1977年イランのテヘラン生まれ。カイロと大阪で育つ。2004年に『あおい』でデビュー。2015年に『サラバ！』で直木賞、2024年に『くもをさがす』で読売文学賞を受賞。複数の作品が映画化されている。近著に『夜が明ける』、谷川俊太郎との共著『すきが いっぱい』など。



ギータ・ヴォルフ　タラブックス代表

ドイツで比較文学の修士号を取得後、1994年にインドのチェンナイで独立系出版社タラブックスを創立。多様なアーティストと協働し、本のかたちとその文化的価値を問い続け、美しい本を作る出版社として名をはせてきた。こども向け・大人向けの本を25冊以上著し、複数が国際的な賞を受けている。2021年より有機農場を営みつつ出版を続けている。

クロージングセッション　クリエイティブ・ウェルビーイング　ともに生きる文化



撮影：Hirama Itaru

青柳正規　アーツカウンシル東京 機構長

1944年大連生まれ。西洋美術史・西洋古典考古学を専門とする歴史学者・考古学者。東京大学副学長、国立西洋美術館館長、文化庁長官などを歴任。50年にわたりイタリアの古代ローマ遺跡の発掘に携わってきた。東京大学名誉教授、文化功労者。主な著書に『ローマ帝国』、『文化立国論』など。



撮影：Hirokawa Taishi

小池一子　クリエイティブ・ディレクター

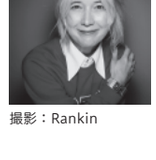
1970年代より西武セゾングループのコピーライティングを手がけ、1980年の「無印良品」創業に携わる。1983年に「佐賀町エキジビット・スペース」を創設・主宰し、多くの現代美術家を国内外に紹介した。2022年に文化功労者に選出され、2024年に旭日中綬章を受章。



写真：
Lisson Gallery Milano

宮島達男　現代美術家

1957年東京生まれ。東京藝術大学大学院美術研究科修了。デジタル数字を用いた作品で国際的な注目を集める。1から9まで明滅する数字に、生から死へ向かう時間を託し、「Keep Changing」「Connect with Everything」「Continue Forever」という思想を探究してきた。



撮影：Rankin

ジャスティーン・サイモンズ　ロンドン市副市長（文化・クリエイティブ産業担当）

20年にわたりロンドンの文化変革を主導し、歴代のどの市政よりも大きな文化への投資を実現してきた。ロンドン五輪の文化遺産イースト・バンクの実現やクリエイティブ産業への成長戦略を展開し、120億ポンドの投資を呼び込んだ。文化と都市をめぐる議論の世界的リーダーとして、「世界都市文化フォーラム」を創設。世界50以上の都市が参加し、文化を通じた変革を推進する。その功績によりエリザベス2世女王よりOBE（大英帝国勲章）を授与された。

スタジオ（ネットワーキング）　STUDIO: NETWORKING



雫境　舞踏家

ろう者の舞踏家。1997年より舞踏をはじめ、欧米や南米など世界各地で公演やワークショップを展開してきた。牧原依里との共同監督映画『LISTEN リッスン』（2016年）をはじめ映像分野でも活動する。異なる身体の交差や、物質・空間と身体が感応し合う「境界のゆらぎ」をテーマに、領域を横断した表現を追求している。



木藤 歩　照明家

愛知出身。日本大学芸術学部演劇学科照明コース卒業。2008年度文化庁の留学制度でベルリンのアートハウスで研修。劇場ではない場での公演デザインに多くかかわり、空間の力と共演する照明をめざすとともに、光に親しむためのワークショップも展開している。最新作に舞台『黙るな 動け 呼吸しろ』などがある。



杉山 至　セノグラファー（舞台美術家）

国際基督教大学卒。在学中より劇団青年団に参加し、卒業後は早稲田大学建築学校（現・早稲田大学芸術学校）で建築を学んだ。演劇・ダンス・ミュージカル・オペラと幅広い舞台美術を手がけている。2014年に第21回読売演劇大賞最優秀スタッフ賞、2025年に第60回紀伊國屋演劇賞個人賞を受賞。芸術文化観光専門職大学准教授。

撮影：栗田一歩

横尾友美　アーティスト

長崎出身、京都在住。ろう者。映画『LISTEN リッスン』への出演をきっかけに、映像、写真、舞台を横断した表現活動を展開している。ろう者の感性や身体性を軸に作品を制作。初の長編映画『わたしたちに祝福を』（2024年）では、旧優生保護法や手話が禁じられた時代など、ろう女性が抱えてきた歴史や痛みを描き、国内外で上映を重ねている。



數見陽子　俳優、手話教師

2002年に日本ろう者劇団に入団。俳優として舞台に立つほか、演出や構成も手がける。2015年にサイレントの身体表現ユニット「うごく作品」を旗揚げ。音や台詞のない身体表現を追求し続けている。慶應義塾大学で日本手話の教育・研究に携わり、NHK「みんなの手話」ではテキスト執筆と手話監修を担当している。



撮影：Ishizuka Sadato

森山開次　ダンサー、振付家、演出家

2005年、ソロダンス『KATANA』でニューヨーク・タイムズ紙に「驚異のダンサー」と評され、2007年にはヴェネチア・ビエンナーレに招聘された。ダンスの枠を越えて舞台芸術を横断的に手がけ、主な演出・振付に東京2020パラリンピック開会式、全国共同制作オペラ『ラ・ボエーム』などがある。『TRAIN TRAIN TRAIN』で芸術選奨文部科学大臣賞を受賞。



撮影：Ikeda Hiroshi

牧原依里　映画作家、演出家

映画『LISTEN リッスン』（2016年）共同監督のほか、『私は母の夢をみる』（2023年）、インスタレーション映像『三つの時間』（2025年）、舞台作品『黙るな 動け 呼吸しろ』（2025年）の共同演出・構成など、映像やパフォーマンスといった形態を横断しながら、現象を可視化する装置としての作品を提供することで、わたしたちの共通性と相違性、そしてこの世界の社会構造を浮かび上がらせる試みを行っている。2025年度（第76回）文化庁芸術選奨文部科学大臣新人賞（芸術振興部門）受賞。



撮影：川瀬一絵

長島 確　ドラマトゥルク

日本におけるドラマトゥルクの草分けとして、舞台作品やアートプロジェクトの現場にかかわってきた。企画立案、リサーチ、台本の翻訳・構成から、ジャンルを越えた協働の場づくり・ケアまで、創作のプロセスを臨機応変に支える。最近の参加作品に『黙るな 動け 呼吸しろ』など。活動の記録に『アトレウス家の建て方』、『ろう者と聴者が遭遇して舞台作品をつくるときに読むハンドブック』など。東京藝術大学大学院国際芸術創造研究科教授。



山口英峰　舞台監督、日本大学芸術学部演劇学科教授

専門は芸術実践論、および舞台芸術のプロダクションマネジメント。舞台監督・プロダクションマネージャーとして、多くのクリエイターと作品創作に携わってきた。2014年より1年間、文化庁新進芸術家海外研修員としてカナダ・ケベック州に滞在。近年の参加作品に、パリ・オペラ座『PLAY』東京公演、新国立劇場『竜宮』などがある。



山田真樹　表現者、アスリート

表現者とアスリートの両面で活動している。2015年にカンパニーデラシネラ『鑑賞者』への出演で舞台デビュー。その後、短距離アスリートを志し、2025年11月の東京2025デフリンピック男子400mで47秒61の日本記録を打ち立て、日本勢金メダル第1号となった。「デフアクターズ・コース」第1期生として表現の場にも立ち続け、NHK Eテレ「手話劇！夏の夜の夢」などに出演している。



栗栖良依　アートプロデューサー、芸術監督

2010年に骨肉腫を患ったことから障害福祉の世界に出会い、SLOW LABEL（現・認定NPO法人スローレーベル）を設立。リオデジャネイロや東京2020のパラリンピック開閉会式で、ステージアドバイザーとしてDE&Iを総合監修してきた。愛知・名古屋2026アジアパラ競技大会では、開会式・閉会式の総合プロデューサーを務めた。

ギャラリー（展示）　GALLERY: EXHIBITION



撮影：加藤 甫

青木 彬　インディペンデント・キュレーター、社会福祉士

1989年生まれ。首都大学東京インダストリアルアートコース卒業。アートを「よりよく生きるための術」と捉え、アーティストや企業、自治体と協働しながらアートプロジェクトを企画している。「ファンタジア！ファンタジア！―生き方がかたちになったまち―」ディレクター（墨田区、2018年～）などを手がけ、近年は社会福祉とアートの接点を探る実践も続けている。著書に『幻肢痛日記』がある。



是恒さくら　アーティスト

アラスカ大学フェアバンクス校を経て、東北芸術工科大学大学院で地域デザイン領域を修了。鯨類と人とのかかわりや海の民俗文化に関心を寄せ、世界各地でのフィールドワークをもとに執筆と刺繍作品の制作を行っている。近著に『ありふれたくじら』など。



井川 丹　作曲家、サウンドアーティスト

「人の声」を創作の中心に据え、演奏会用作品やサウンドインスタレーションを手がけている。また、市民参加型のワークショップやこども向け創作プログラム、異なる専門性をもつ人々との協働などを通して、年齢や立場の異なる人々がそれぞれのままで関われる場のあり方を探ってきた。作曲を「時間と空間のデザイン」と捉え、その場に何を置き、何が生まれるかを思い描いている。



撮影：梅田彩華

富塚絵美　非営利のアートディレクター

東京藝術大学キャリア支援担当教員。2008年よりアートプロジェクトの企画運営、2019年より文化施設における教育普及事業を担うなど、専門家と協働する領域横断的な共創プロジェクトを展開してきた。2022年からは福祉施設を拠点としたアートプロジェクト「TURN LANDプログラム」に従事し、障害者やこども、高齢者とともに文化プログラムの開発に挑んでいる。



藤堂栄子　EDGE会長

慶應義塾大学法学部政治学科卒業。教育学修士。息子がイギリス留学中にディスレクシアと判明したのを機に、2001年にEDGEを設立、会長に就任。2004−24年に日本発達障害ネットワーク（JDDnet）理事・副理事長を経たのち、2026年より同専門委員を務める。2016−23年に星槎大学特任教授。厚生労働省社会保障審議会障害者部会委員など各省庁の検討委員を歴任し、障害者差別解消法・読書バリアフリー法の制定・改正に向けた提言活動にも携わってきた。



碓井ゆい　美術作家

身の回りの素材や手芸の技法を用い、社会制度や歴史に対する批評的な考察を、平面や立体、インスタレーションで表現している。ジェンダーや生殖、労働や保育まで、日常の地続きにある社会の構造を問い直すアプローチを続けている。VOCA展2018でVOCA賞を受賞。近年の主な展覧会に「SENSE ISLAND/LAND 感覚の島と感覚の地 2024」（猿島および横須賀市街地、2024年）など。

撮影：中尾あづさ



黒川 岳　美術家

1994年島根生まれ、京都在住。自らの体でさまざまな物・事に触れることの喜びや不思議さと向き合う作業を出発点に、彫刻や音楽の手法を用いて、その感応から立ち上がるかたちや所作を表現してきた。主な展覧会に「美しいHUG！」（八戸市美術館、2023年）、「バグスクール：野性の都市」（BUG、2024年）などがある。



田中文久　作曲家、サウンドプログラマー

東京藝術大学大学院音楽研究科修了。音楽に関する技術やテクノロジーを駆使し、楽曲制作のほか、あらゆるものを音に変換する「ソニフィケーション」を用いた制作・研究・開発など、音楽の新しいあり方を模索・提示している。主な担当作にゲーム「ポケモンフレンズ」、教育アプリ「WONDER BOX」、NHK特集ドラマ「ももさんと7人のパパゲーノ」などがある。



小助川雅人　資生堂 アート＆クリエイション本部 エグゼクティブ・クリエイティブ・ディレクター

WEB動画「High School Girl? メーク女子高生のヒミツ」（2016年）により、カンヌライオンズ、The One Showなど世界的な広告賞を多数受賞。カンヌライオンズフィルムクラフト審査員。「美を疑え－資生堂クリエイティブ展－」（資生堂ギャラリー、2025年）において、ディスレクシアに悩む小学生の状況を疑似体験できるVRコンテンツ「もしもディスレクシアの小学生なら」を企画。

アクセシビリティ
ACCESSIBILITY

さまざまな人がそれぞれの方法でプログラムに参加できるよう、
以下のアクセシビリティ対応を行っています。どうぞご利用ください。

音声ガイド

場面の説明や人物の様子などの視覚情報をナレーターがリアルタイムで解説します。
ホールB5のプログラムでご利用いただけます。同時通訳レシーバーをご利用ください。

手話通訳、字幕

会場ごとに手話通訳や字幕表示がございます。
会場内は全席自由席ですが、手話通訳および字幕が見やすいお席をご案内しています。
ホールB5プログラム：日本手話通訳、国際手話通訳、日英字幕
ホールD5プログラム：日本手話通訳、日英字幕
ロビーギャラリープログラム：日本手話通訳

FM補聴システム

ホールB5およびホールD5のプログラムではFM式の補聴システムをご利用いただけます。
サポートカウンターで受信機をお貸し出ししています。

多言語対応

ホールB5およびホールD5のプログラムでは、登壇者の使用言語にかかわらず、
日本語・英語の同時通訳がございます。同時通訳レシーバーをご利用ください。

カームダウンスペース

カームダウンスペースは、音や光、人の多さなどの刺激から一時的に離れ
休憩するためのスペースです。ホールB5とホールD5のホワイエに設置しています。
少し休みたい場合などにご利用ください。

センサリーキット

センサリーキットは、感覚的な刺激を調整したり、
落ち着いて過ごしたりするためのアイテムです。サングラスや耳栓、
フィジェット玩具（手のなかで単純な動作を繰り返すことで、ストレスや不安を
緩和する玩具）などを用意しています。各会場でお貸し出ししています。

車いす

すべてのプログラムに車いすでご参加いただけます。
会場内での移動や座席についてサポートが必要な場合は、会場スタッフにお声がけください。

key visual concept

キービジュアルコンセプト

地模様の波紋のような形状はインクのにじんだ跡で、印刷した紙の上に落ちた水滴による偶然の産物です。デザイナーの樋口舞子はそれを「きれいだな」と感じ、「Bleed」（にじみ）と命名し、インスタグラムに自分の作品と並べて投稿していました。それを樋口が今回のキービジュアルのためのグラフィック素材として、あらためて見出したものです。

もう一つの素材は、クレマチスのつるで表現された書体「Clementite（クレメンタイト）」です。キービジュアルのデザインを検討していた樋口に、スタジオメイトのタリク・ハイブアが「似ているプロジェクトがある」と、自身のフォント開発チーム「Silly Type Foundry」で扱う、ある書体について教えてくれたといいます。この書体は、アーティストのフランソワ・デイが、スイスのマレヴォーズ精神科病院の患者たちとともに、病院周辺の庭園や森で行ったワークショップで、野生のクレマチスを見つけ、そのつるを編み込み、折り曲げ、アルファベットの文字をかたちづくったものでした。

じんわりとにじむ複数の波紋のような「Bleed」は動きと広がりを、植物のつると格闘しながら創作した「Clementite」は生命力と躍動を、それぞれ感じさせます。

この二つの素材を掛け合わせたキービジュアルは、マルチスピーシーズ*の世界観がもたらすさまざまな存在同士の結びつき、その先に広がる可能性、そして、誰かが一方的につくるのではなく、見つけ、触れ、語り、ともにかたちにしていくプロセス自体を尊重する、本会議のテーマ「Moving Together ともに生きる文化」とも深く響き合います。

日常のなかで生まれたものを美しいと感じ、小さな変化に気づく。ささやかな心の動きの蓄積が、クリエイティブ・ウェルビーイングにつながるものと考えます。このキービジュアルは、芸術文化を通じてともに考え、身体を動かし、新たな関係性を編み上げていく本会議のビジョンを象徴しています。

*マルチスピーシーズ（Multispecies）…人間のみならず、動物、植物、菌類などあらゆる種（species）が絡まり合って世界をつくり上げているという見方

クリエイティブ・ウェルビーイング・トーキョー
だれもが文化でつながる国際会議2026
Moving Together ともに生きる文化

会期：2026年10月28日（水）～11月1日（日）
会場：東京国際フォーラム
主催：東京都、公益財団法人東京都歴史文化財団 アーツカウンシル東京

パンフレット企画・制作：アーツカウンシル東京
編集：渡辺龍彦（Ballen）
校正：永峰美佳
デザイン：樋口舞子、久保海音
キービジュアル「Clementite」書体制作：フランソワ・デイ／Silly Type Foundry
印刷：株式会社山田写真製版所

発行：公益財団法人東京都歴史文化財団 アーツカウンシル東京
〒102-0073　東京都千代田区九段北4-1-28　九段ファーストプレイス5階

＊営利・非営利問わず、本書のコンテンツを許可なく複製・転用・販売するなどの二次利用を禁じます。　©アーツカウンシル東京

Planning Sheet

「だれも」って誰のこと？

＝芸術？ ＝アート？
ここで言う「文化」とは？

どのように「つながる」のか？
どうやって「つながる」のか？

2030年
共生社会の実現へ

だれもが文化でつながる 国際会議2026

どう関係している？

日々のこと
日常から、見出す？
自らつくり出す？

クリエイティブ・ウェルビーイング・トーキョー

そもそも何？ もう一度、ゼロから考えたい

世界へ発信？ 世界とつながる
ex. ロンドン、ニューヨーク、大阪…

「WITH」ではなく「TOGETHER」？
・一緒に、みんなで、共有する、つながり
・コミュニティ / コレクティブ / ネットワーク

アクション？

「動く」「動かす」の意味？

自主的、
主体的、
能動的

MOVING TOGETHER
ともに生きる文化

＝ クリエイティブ・ウェルビーイング？
尊厳 / アイデンティティ
ビヨンド・バウンダリー
境界を溶かす トカ

会期 | 2026年10月28日(水)～11月1日(日) 会場 | 東京国際フォーラム（東京都千代田区丸 の内3丁目5-1） 主催 | 東京都、公益財団法人東京都歴史文化財団 アーツカウンシル東京

「人」ではない 他者？
自然 / マルチスピーシーズ
ジェンダー マルチジェネレーション…

2026.10.28



TOKYO
METROPOLITAN
GOVERNMENT



ARTS COUNCIL TOKYO

